

## 第 53 回(2011. 6. 8 配信)

## 雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「中東・アラブ社会 (1)」

## 中東・アラブの国がゆれている

3月11日に起きた東日本大震災は、その広範囲にわたる巨大津波の被害と原子力発電所の崩壊とその影響の大きさは世界中の人々にとって「まさか！」と思う出来事であったに違いない。今、日本が地震で揺れているが、中東・アラブ諸国も揺れている。チュニジアの騒動にはじまり、エジプトのムバラク政権の崩壊、さらに、リビアのカダフィ独裁に対する反政府運動に欧米各国の介入がはじまった。ここでも「まさか！」と思う出来事が続いている。この中東・アラブ諸国における一連の騒動は、アラブ諸国の政治的・軍事的・宗教的などのそれぞれ指導者的な立場にあるシリア、ヨルダン、そしてサウジアラビアまで飛び火している。なによりも驚いたのはリビアのカダフィ政権に対する反乱であろう。

1969年、弱冠27歳のカダフィ大尉によるクーデターでイドリース王国から共和国になり大衆による共同体制を敷いた。事実上の国家元首にはカダフィ氏が就任して今日に至っている。反欧米路線を取りアメリカからは「テロ国家」として空爆を受けたりしていたが、最近では目立った動きはなかった。カダフィ氏はエジプトのナセル大統領に心酔し、アフリカ合衆国構想(緑のプロジェクト)を表明したりしてきた。産油国で国としては裕福ではあるが、民衆は厳しい労働を嫌い、アフリカ諸国からの移民労働者に頼ってきた弊害から、民衆の働き場所がなくなって失業率が高くなったことも、今回の反乱の要因ではないかとみられている。この弊害はリビアだけでなく中東の産油国によくみられる傾向ではあるが、カダフィ氏の力が落ちてきたことは間違いない。

こういった一連の激しい動きは、「世界の火薬庫」といわれる中東情勢にどのような影響を及ぼすだろうか。非常に心配である。アラブ諸国は、イラクの故サッダーム・フセイン大統領の例にみられるように、ある意味で、指導者はカリスマ性と強権を発揮しなくては国民が纏らない性格を持っている。

チュニジアは、建国の父と慕われたブルギバ大統領が1987年に死亡し、ベン・アリ氏が大統領になったが、慢性的な失業率は変わらず、今回の暴動を招いた。地中海に面したチュニジアは、ヨーロッパからの観光客が押し寄せ、夏は非常に活気に満ちているが、冬には観光客もなく閑古鳥が鳴く寂しさで、大きな産業も無く非産油国のこの国では仕事が激減する。人々はその不満からバスなどへの投石やデモなどが時々起きていた。しかし、これまではカリスマ性を持つブルギバ大統領の説得に従ってきた民衆も、ベン・アリ氏では抑えきれなかったというところであろう。

また、エジプトは1952年にガマル・ナセル少佐がクーデターを起こし、ファルーク国王を追放して大統領となり共和国宣言をした。民衆が絶大な信頼を寄せたナセル氏の死後、1970年に大統領となったサダト氏は1981年に暗殺されてしまい、ムバラク氏が大統領となったものの経済状態も好転せず、カリスマ性も無いムバラク氏が強力な権力をもって民衆の不満を抑えてきたが、今回チュニジアの暴動を契機に、民衆の不満が爆発して追放されることになった。

シリアも1967年軍事クーデターで大統領となった対イスラエル戦の空軍司令官で信頼の篤いハーフェイズ・アサド氏の絶大な指導力に抑えられていたが、2000年大統領の死去によって後継者となったのは息子のバッシャール・アサド氏であり、まだ父親のようなカリスマ性はない。隣国のヨルダンも、1999年に預言者ムハンマドの直系であるハシュミット家という血統の良さと強い指導力とでアラブ各国からも信頼の大きかったフセイン国王が死去して、息子のアブドゥッラー二世が即位してまだ間もない。加えて、シリアは国民の大多数がイスラム教徒スンニー派であるがアサド家は少数派のシーア派の出である。ヨルダンも、これまでアラブ系遊牧民の族長会議が国王を支持

してきたが、1948年のイスラエル建国によるパレスチナ難民がなだれ込んで、今では国民の8割近くがパレスチナ人によって占められている。こういった要素もあって、ある意味においては非常に難しい政権であるといえる。

民衆が勝手なことをいい出したら混乱するのはどこでも当前のことだが、中東・アラブ人社会においては、それが非常に顕著である。パレスチナ問題ひとつとってもアラブ諸国の足並みがそろわないのを見ればよくわかるであろう。このままこれらの国々が新政権になっても民衆が満足する結果が現れるとは信じがたい。加えて、経済問題だけでなく対イスラエル問題やイスラム過激派の活動など、これら諸国も内外に大きな問題を抱え込んでいる。中東・アラブ諸国の指導者的な立場にあるヨルダン、シリア、サウジアラビアなどの国が混乱したら中東にどんな大きな問題が起きるか、非常に心配な事態になった。

そこで、今回から中東・アラブ社会の話をしてみたい。当然のことながら、その地の文化はその地に生まれて育ってきた人でなければ理解できないことが多い。したがって、理解するのも説明するのも、どちらも非常に困難であることはいうまでもないことである。その理由は、地理的、歴史的あるいは気候風土などの要因が我々の育ってきた環境と違うからだが、特に宗教という厄介な存在がより理解されにくくしている。とりわけイスラム教という日本人になじみの薄い宗教が絡んでいるから、中東・アラブ社会を理解するのは極めて難しい。

余談になるが、1990年『悪魔の詩』という小説が日本語に翻訳されて出版された。ところが、1991年の夏、翻訳者の五十嵐一筑波大学助教授が大学のキャンパスで何者かによって殺害された。当時は「悪魔の詩訳者殺人事件」として大きく報道されたものである。原作者であるインド生まれで元イスラム教徒のイギリス人のサルマン・ラシュディ氏は、1989年にこの本を出版したが、イスラム教を冒とくした、として、当時イランに復帰したホメイニ師率いるイスラム急進派によって暗殺命令が出されていたこともあって、五十嵐氏もイスラム教徒に暗殺されたのではないかとの噂でもちきりであった。

しかし、この本を日本人が読んでも、どのようにイスラム教を冒とくしたのか、何がいけないのか、ほとんどの人は理解できないに違いない。明治の「廃仏毀釈」あるいは太平洋戦争後の極端に変わった学校教育などによって、日本人には「宗教がいかに民衆に密着したもの」であるかということ認識する機会が少なくなってきたからであろう。事実、アメリカ人がいかに『聖書』に基づいた生活をしていることさえ日本人の多くは知らない。『旧約聖書』にある天地は6日間で造られ、7日目は休養日とされたから一週間を7日で7日目は日曜日にしたということ信じ、人間は神の姿に似せて土から作り出された、などという『聖書』の記載を信じてダーウインの『進化論』を否定する多くのアメリカ人がいる、などアメリカに限らず世界中の多くの人たちが宗教の教えが生活信条になっていることを多くの日本人は知らない。

だから、イスラム教徒が多く住んでいる中東・アラブ社会が、どれだけイスラム教に大きく影響されているか理解できないのが当然であり、多くの日本人は小説やマスコミの報道等で断片的に知るだけで、ディズニーのアニメや子供のころ読んだ『アラビアン・ナイト』の絵本などから、かなりの部分で誤った理解をしている。そこで、できるだけ簡潔に、また、雲竹斎も小心者だからイスラム教徒を刺激しないように気を付けて、日本人の多くが誤解している中東・アラブ社会の話をしてみたい。

なお、「イスラム教」は本来「イスラーム」である。この言葉には「教え」という意味が含まれているから、あえて「教」を付けないのだという。また「イスラム教徒」は「ムスリム(女性形はムスリマ)」と表記するのが正しいのだが、耳慣れない言葉は理解し難くなるので、あえて「イスラム教」あるいは「イスラム教徒」と表記する。預言者「モハメッド」は人名だから正しく「ムハンマド」と表記したい。そのほか多くのアラビア語が出てくるが、外国語を仮名に直すのは非常に難しいことでもあり、また地方によりアラビア語の話し言葉が違うので、自分が聞いたり本などで見たりした表記が違うと思う箇所が随所にみられるかもしれないが、そういった理由からであることが多いので理解していただきたい。

次回から、基礎的なことがらに加えて、日本人になじみの「カスバ」や「ハーレム」あるいは「ベリーダンス」などが、いかに諸君が面白おかしく誤解しているか、その真実にふれてみたい。